

氏 名	さか べ しょう こ 坂 部 晶 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 378 号
学位授与の日付	平 成 19 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	「満洲」経験の社会学 ——植民地の記憶のかたち

論文調査委員	(主 査) 教 授 松 田 素 二	教 授 伊 藤 公 雄	助教授 蘭 信 三
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、戦争・植民地という過去の現実を人びとはどのように解釈し記憶しているのかにかんして、「満洲国」という植民地の経験をとりあげて考察する。19世紀から20世紀にかけて、日本は台湾、朝鮮、中国およびその他のアジア諸国にたいして植民地侵略をおこなった。そのうち「満洲国」の国家としての歴史は、1932年の「満洲国」樹立から1945年の日本の敗戦までの14年間である。本稿では、「満洲国」で暮らした人びとのうち、植民した側である日本人と、植民された側である中国人双方の、当事者たちの植民地経験を題材としてとりあげ考察する。本稿の目的は、第一に、当事者の記憶をとおして植民地における人びとの生活世界を再構成すること、第二には、これらの当事者たちが、それぞれの植民地経験をどう位置づけているのか、また彼らにとってその経験がどのような影響を与えた（与えている）のかという彼らの記憶のかたちについて比較・考察することである。そして最後に、このような記憶の比較・分析をとおして、マクロなポリティカル・エコノミー構造のなかでとらえられてきた植民地の経験を、人びとの日常生活世界の輻輳的で重層的な語りとして対象化していく。植民地経験の多層的な語りを取りだしてみることは、構造的非対称性の強固な社会における、構造的強者および構造的弱者の主体構成の問題へ近接するためのひとつの契機になると考えるからである。

序章では、先行研究の検討をとおして本稿の位置づけを行う。植民地研究、「満洲国」研究は、歴史学のなかで発展してきた。日本では1970年代、中国では80年代に盛んとなる日本帝国主義侵略にたいする「科学的」分析にたいして、90年代には、「満洲国」を植民地国家として正面からとりあげる政治思想史や、教育史、建築史、文学、社会学など多様な研究が展開する。公文書等の資料を中心とした歴史学的研究の蓄積にたいして、植民地社会で暮らした当事者自身の「生きられた植民地経験」を分析する社会学的研究は数少ない。本稿の目論見は、近年の戦争の記憶論の論点もととりいれつつ、植民地の当事者経験の解明を日本と中国の双方向から行っていくことにある。

以下の本論の構成は、資料の性質上、植民者としての日本人の語りである前半（第1章から第3章）と被植民者としての中国人の語りである後半（第4章から第6章）とにわけられる。

前半部、日本人植民者の記憶分析の第1章では、戦後日本社会における「満洲」経験についての言説空間の見取り図を示す。ここでは、従来の開拓団研究では注目されてこなかった「満洲」の日本人市民による経験の表象をとりあげ、その資料の性質から為政者による建国の語り、同窓会の日常生活の語り、文芸同人誌において蓄積される記録の三種に分類する。ここでの中心となる論点は、「満洲国」において喧伝された建国理念という支配のレトリックが、戦後の日本人のあいだでどのように語られたかにおかれており、このような支配のレトリックのなかの理想主義的側面が、戦後の日本社会において、当事者間での「満洲国」のマスター・ナラティブを志向するものであること、さらにこの支配のレトリックと植民地の日常生活の語られ方との関係性について分析している。

第2章は日本人市民の回想についてのより具体的な分析である。実例として、植民地の日常の記憶を表出する母体である「満洲」関連同窓会をとりあげ、119団体にたいするアンケート調査を行った。その回答をもとに、同窓会の諸類型とその活

動の実態について概観し、そこで語られる日常風景の記憶を分析する。ここでは、同窓会報で語られるノスタルジアに満ちた日常世界の記憶から、戦後日本社会における「満洲」のマスター・ナラティブを相対化する視点をとりだすことは困難であるが、このような記憶は彼ら自身にとって過去を位置づけ直すための一つの準拠点となっていることを指摘した。

第3章は、「満洲」への植民者のもうひとつの類型である開拓民の語りをとりあげる。「満洲」開拓民は、多くが国境地帯へ入植しそこからの逃避行を経験している。ここでは開拓団の送出県として有名な長野県の開拓団送出と引揚げの過程を概観し、各市町村における53の慰霊碑碑文を分析し、それと語り部による記憶の語りを対比的に示す。市民としての植民者とは大きく異なるこのような経験の語りのなかにも、集団レベルでは戦後の社会への適応過程のなかで植民地のレトリックは採用されていること、しかし個人レベルでは直接経験としての中国社会へのまなざしが存在することを指摘した。

第4章から第6章までは、植民された側である中国東北社会における記憶の考察である。第4章では、中国東北社会における「満洲」にかんする集合的記憶の典型なかたちを示すものとして、東北各地に存在する歴史記念館や博物館の展示形式の分析を行う。本稿では、21ヶ所の記念館・博物館にたいするインタビュー調査とフィールドワークを試み、これらの施設を、そのコメモレイションの形式により、烈士墓の時代、万人坑の時代、博物館の時代の3期に分類する。これらのコメモレイション施設が表出する植民地にたいする展示の様式から、ナショナル・ヒストリーとして一貫したように見える中国東北社会における「満洲国」解釈の枠組みにも、それぞれの時代によって微妙な変遷が読みとれることを論じた。

第5章では、東北社会全体のなかでのより特定の地域のコメモレイションの形成プロセスを論じる。具体的には、かつて国境の守備として築城された要塞を記念するプロジェクトが進行している黒竜江省の小都市をとりあげ、その記念化プロジェクトの経緯と、中国側「満洲」経験の一つの典型である「勞工」の記憶についての聞きとり実践について、フィールド調査にもとづき論じる。ここでは、このような実践が、たんに国家レベルの「満洲国」解釈というだけでなく、その地域にとっても、植民地期の街の歴史の再解釈を提示していることを指摘した。

第6章は、中国東北社会における個別の記憶の位相にかんする分析である。ここでは、わたし自身が参加したインタビューのデータをもとに、これまで論じてきた植民地にたいする集合的記憶のスタンダードを形成している抵抗と被害の語りの形式にたいして、それにからまり、あるいは抜け落ちていく個人的な経験の語りの諸相について分析する。とくに「満洲国」当時、政府の部署に勤務した経験をもつ老人と、「慰安婦」として朝鮮から来た女性の語りをとおして、中国社会がもつ「満洲国」解釈の枠組みの限定性について論じている。

終章では、これまでの分析を総括し、植民者—被植民者、構造的強者—構造的弱者という植民地社会の構造的非対称性の転換後、それぞれの社会において植民地の記憶がどのような言説空間のなかで表象されてきたかを総合的に考察する。ここでは、日本社会と中国東北社会のそれぞれについて、そこで見られる語りがともに、ナショナルな記憶としての統合の圧力とその圧力との葛藤を示していることを論じた。本稿は、「満洲国」という植民地の歴史的経験をこのような葛藤のなかに見ていくことをとおして、植民地社会を記述するさいの一元的な歴史の語りに抗した、多声的な記憶による経験表象への道筋の可能性を示唆するものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦争と植民地支配の時期に「満洲」で生を営んだ人々が、その経験をいかにして記憶し表象するかについて、フィールドワークと文献資料に基づいて考察を試みた歴史社会学的研究である。

「満洲経験」の歴史社会学的研究は、これまで、日本人農民の「満洲移民」の経験について精密なライフヒストリー法によるすぐれた研究を蓄積してきた。しかしながら「満洲経験」の総体を日本と中国社会双方をフィールドとして解明しようとする試みはきわめて少なかった。本研究は、こうした研究史上のパイオニア的試みとして位置づけられる。

坂部氏の研究の社会学的意義は大きく以下の三点にまとめることができる。

第一の意義は、日本社会における「満洲経験」の多様な表出のあり方を、たんねんに掘り起こし錯綜した言説をときほぐしていったことである。坂部氏は、そのために「ナラティブ研究」におけるマスター・ナラティブとモデルストーリーという概念をキーワードにしながら、そこからもれおちる記憶の諸相に着目していった。マスター・ナラティブとは、「社会全体にわたって文化・歴史意識を規定する国民国家の規範的語り」のことであり、モデルストーリーとは、これと迎合・批判

しながら標準化されて紡ぎ出される「国民国家内部のさまざまな共同体の語り」のことである。たとえばかつての「満洲国」指導層を含む「満洲回顧集刊行委員会」が発する「五族協和」の理想を郷愁する語りは、前者の代表的なものである。また「満洲」植民地支配を日本帝国主義批判のコンテクストで鋭く提起する語り口は、モデルストーリーの一つとして捉えられる。

坂部氏は、こうした語り口を確認したうえで、これらと異なる記憶の表し方に焦点を当てようとした。それは、かつて「満洲」で学校生活を送った卒業生が組織する同窓会組織の語りであり、また1932年に大連で創刊され一時の休刊を経て戦後今日に至るまで活動をつづけてきた、文芸同人誌『作文』に集う執筆者たちの語り口であった。坂部氏は、これらの主要な語り口が、全体社会の構造変化とともに変遷していく過程を追いながら、「満洲経験」が非歴史化され断片化されていくことを明らかにした。そのうえで、こうした断片化や非歴史化という記憶の在りようが、一方で、かつて植民者・抑圧者の側に位置した構造的歴史の物語を直視することの回避という側面をもちながら、他方で、この物語への消極的拒否としても立ち現れている様相を、彼らとのインタビューのなかでみられる屈折した語り口と、「満洲」の故郷に対する再訪活動のなかで確認している。

本研究の第二の、そしてユニークな意義は、「満洲経験」を被植民者の中国側の視点にたって、記憶の在りようを分析している点である。ここでも先に述べたような、マスター・ナラティブやモデルストーリーの検討が行われる。「偽満洲国」「傀儡国家」批判と抗日愛国というマスター・ナラティブが、解放後にいかにメッセージ内容を変化させていくかについて、坂部氏は、東北三省および内蒙古自治区東部にある抗日戦争を集合的記憶化する施設（コメモレイション施設）に注目する。坂部氏は、20余りの施設を調査し、それらを烈士墓、万人坑、博物館などに分類し、主要に出現する時代区分を確定した。そのうえで、こうした施設に付随する記憶表象の主要な語りが、それぞれ個人的死、集合的死を祀る語りから集合的生を確認する語りへと変化していったことを示した。

さらに坂部氏は、かつて「満洲国」において労働者として生活した当事者へのインタビューを実施し、中国人研究者が採集した証言と比較しながら、被害の語りのモデルストーリーとそこからはみだす生の経験について詳細な民族誌的記述を行った。これらの試みを通して、中国の側でも、集合的記憶を編集するマスター・ナラティブとモデルストーリーが、強力に作用しながら、そこに完全には包摂されない個別化された記憶語りが広く社会に浸透していることを明らかにした。

こうした分析は、黒竜江省、吉林省の社会科学院ならびに東北師範大学の研究者の協力を得て二年間にわたって継続してきたフィールドワークの成果であり、この点の取り組みが遅れていた日本の社会学的「満洲」研究に対する大きな貢献として評価できる。

本論の第三の意義は、「満洲経験」に対する語りが一元化の作用に抗して多様化していることを指摘した点にとどまらず、こうした多様化した語り自身が、多重に錯綜し変容している点を明らかにした点である。そのことは本論の第6章に詳述されている。坂部氏は、黒竜江省東寧県における聞き取り調査のなかで、老いた劳工たちの個人的な記憶を掘り起こすが、そこで、きわめて微細に個人化された歴史表象や、語ることが不能となる場面に遭遇する。こうしたフィールドワークを通して、坂部氏は「多声法（polyphony）」的記憶の記述のあり方自身の問題点を指摘しながら、さまざまな異なる声を一人の個人が発する状況を直視する必要を強調し、こうした首尾一貫しない、異種の語り口の併存のなかに、民衆の記憶のもつ潜在的創造性を見いだそうとしたのである。

以上のように本論文は、「満洲経験」の記憶を「多声法」的様相に注目しながら多層的に記述し、しかも、たんなる「多声法」の適用ではなく新たな視点を加味して、記憶表象の創造性を明らかにした意欲的な研究である。しかしながらいくつかの点で不満ものこる。一つは、歴史史料、聞き取り資料の取り扱いに些か恣意的な点があり、かつ資料のクリティークが十分になされていない点が見受けられることであり、第二には、日本と東北三省における「満洲」経験者の生の証言が、民族誌学上の「厚い記述」となりえていない点である。しかしながら、これらの問題点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年11月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。